

## 看護学生が「芸術・音楽」の授業を通して学んだこと －「深く聴くこと」を中心に－

梶 ひとみ<sup>1)</sup> 小濱 優子<sup>1)</sup>

### 要 旨

A看護短期大学では、「芸術・音楽」の科目を「人間理解の基礎」に位置づけており、これまで、看護教育の独自性をもった授業内容を模索してきた。本稿では、「芸術・音楽」の授業内容を紹介し、学生の感想やレポートから、「深く聴くこと」に焦点を当てて学生の学びをまとめ考察した。その結果、次のことが明らかになった。1. 音楽と人の心との結びつきを再認識することによって、人間の想いをより深く理解していた。2. 「深く聴くこと」に重点をおいた様々な授業内容や演習を通して、傾聴することやコミュニケーションなど看護にとっても重要な部分を学んでいた。3. 芸術の深さや素晴らしさに触れて喜びや感動を経験することによって、より豊かな感性が育まれていた。これらのことから、「芸術・音楽」の授業は、芸術の深さ、音楽の楽しさという側面を失うことなく、学生の「聴く力」を育て、学生自らが学びを看護に生かす可能性を引き出していることがわかった。

キーワード：看護学生 芸術・音楽 授業 深く聴く

### I はじめに

中学、高校の音楽における文部科学省の教育目標をみると、中学、高校とも共通して「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」という趣旨が述べられている<sup>1)</sup>。A看護短期大学の教育目標<sup>2)</sup>をみると、「人間を深く理解する幅広い教養、相手を尊重できる豊かな感性を養う」とあるように「人間」に軸を置いており、「芸術・音楽」は科目区分として「人間理解の基礎」の中の一科目となっている。そのような目標や位置づけの上に、看護教育の独自性を持ったA看護短期大学ならではの「芸術・音楽」の授業を模索しながら進めて来た。その授業内容を紹介し、学生の学びを明らかにすることによって本授業の意味について考えていきたい。

「音楽」は楽曲として演奏されるものだけに留まらない。音楽を構成する「音」は、身の回りの様々な音から精神的世界を現す音まで幅広く捉えること

ができ、人間の行動、言葉やしぐさの中にもリズムや表情が存在している。それらを学び取るために、「芸術・音楽」の授業では、一貫して「聴くこと」「見つけること」「感じ取ること」に重点をおいている。

学生たちにとって音楽は身近なものであり、音楽が好きという学生は多い。授業を通して、学生たちが日頃の「好みの楽曲を気分よく聴くこと」から一歩踏み込むきっかけを得、音楽が持つ力や心身への影響、また曲が生まれた背景、文化や歴史などに思い至ることを目指している。これらの学びが「人間」について深く考え、情操を豊かにするための一助になっているのではないかと考え、看護学生が「芸術・音楽」の授業から学んだことを明らかにしたい。

前回、我々は授業に和楽器の生演奏を視聴する学習体験を取り入れ、演奏終了後に学生が提出した感想レポートを分析することで、感動の経験を通して幅広い教育効果が得られたことを明らかにした<sup>3)</sup>。今回は、授業全体を紹介し、その中で特に「音環境」の単元を中心に取り上げて、「深く聴くこと」に焦点を当てて学生の学びを考察する。

1) 川崎市立看護短期大学

## II 研究目的

本研究の目的は、本学1年次選択科目「芸術・音楽」において、平成27年度受講生が授業全体を通して学んだことを「深く聴くこと」に着目して取り上げて明らかにし、看護学生が「芸術・音楽」を学ぶ意味を考察することである。

## III 用語の定義

聞くこと=hearingは聴力、自然に耳に聞こえるものを指し、それに対し、聴くこと=listeningは「意識的に耳を傾けて聞く」を指す。『GENIUS英和辞典』によるとlistenは「『ある音の意味を理解するために注意を払う』が本義」とあり、聴くこと=listeningは「耳を傾ける」「聞こうと努力する」などの意味合いが記されている。本稿で取り上げる「聴くこと」はlisteningを指している。

国語の辞書においても、『広辞苑』では「広く一般には『聞』を使い、注意深く耳を傾ける場合に『聴』を使う」とあり『類語国語辞典』（角川書店）では「『聞く』は、音や声を耳に感じ認める意、『聴く』は、

聞こえるものの内容を理解しようと思って進んでいく意である」と記されている。また、「深く聴く」の『深い』は『大辞林第三版』では「心の底から強く感じている。考えを十分にめぐらしている。物事をよく見極めている」の意味が解説されている。本稿で取り上げる「深く聴く」は「心の底から聴く」「十分考え、よく見極める」という意味合いを加えたものである。

## IV 研究方法

### 1 研究対象

A看護短期大学3年課程1年生79名の中で、選択科目の「芸術・音楽」を受講している52名のうち、同意を得られた学生50名のレポートを対象とする。

そのレポートの内容は、全ての講義を通しての最終レポート「『芸術・音楽』を受講してあなたが学んだこと」、授業過程における課題として「ある時間（2-3分）まわりの音に耳をすませ、聞こえた音全てを書き出す」、そして「見学先の病院で『音環境』について気づいた事をあげる」の3点である。

表1「芸術・音楽」授業内容一覧

| 回    | 授業のテーマ                           | 授業の関連                                 |
|------|----------------------------------|---------------------------------------|
| 第1回  | ガイダンス 音楽から何を学ぶか                  | <input type="checkbox"/> 自分と音楽の関わり    |
| 第2回  | 人間の営み・文化と音楽 ①                    | フィードバック                               |
| 第3回  | 人間の営み・文化と音楽 ②                    | <input type="checkbox"/> 他者と音楽の関わり    |
| 第4回  | 音楽とコミュニケーション                     | <input type="checkbox"/> 日本の文化について    |
| 第5回  | 日本の伝統と音楽 ① <三味線の専門家を迎えて>         | 生演奏鑑賞 <input type="checkbox"/> 感想     |
| 第6回  | 日本の伝統と音楽 ② 音・魂・宇宙                |                                       |
| 第7回  | 音環境 ① 耳を澄ませて 音風景(サウンドスケープ)       | 音聴き課題 好きな音                            |
| 第8回  | 音環境 ② 音から広がる世界 音と人間の関係 *医療現場の音環境 | 分析とフィードバック                            |
| 第9回  | 音楽療法 ①                           |                                       |
| 第10回 | 音楽療法 ②                           | <input type="checkbox"/> 生演奏が心身に与える影響 |
| 第11回 | 民謡 こもりうた                         | <input type="checkbox"/> 幼いころ聴いた歌     |
| 第12回 | さまざまな音楽 受け継ぐ音楽、羽ばたく音楽            | フィードバック、歌唱                            |
| 第13回 | 心と技                              | 病院見学 <input type="checkbox"/> 病院の音取材  |
| 第14回 | 広がる音の世界                          | 課題提出                                  |
| 第15回 | まとめ                              | * フィードバック                             |

- アンケート
- 課題
- 授業内レポート

表2 「音環境」の授業展開の流れ

| 授業進度 および 授業内容  |
|--|
| <p>前段階の授業</p> <p>文化の違う2種類のタイコの聴き比べ（人間の営み・文化と音楽）</p> <p>自然と融和し自然の中に音楽を聴くという特徴を持つ日本文化に触れる（日本の伝統と音楽）</p> <p>津軽三味線の生演奏鑑賞(ク)</p> <p><u>「音聴き課題」の実施</u></p> <p style="text-align: center;">↓</p>  |
| <p>「音環境」2回4時間</p> <p>音環境① 「音を見つける」私達の生きている世界が様々な音に満ちていることを再認識</p> <p><u>マリー・シェーファーによって提唱された「サウンドスケープ」について学ぶ</u></p> <p><u>音聴き課題の分析</u> 図2</p> <p>音環境② 私たちが見つけた音たち 音聴き課題より「私の好きな音、音風景」の</p> <p>フィードバック</p> <p>「音を表す」音を描く言葉、言葉の描く音</p> <p>オノマトペ、演劇、詩、ことばあそびうた など</p> <p><u>音と人間の関係 騒音とは、静けさとは</u></p> <p>社会問題としての騒音</p> <p style="text-align: center;">↓</p> |
| <p>応用段階およびまとめの授業</p> <p>耳の不自由な人と共に感じる音楽 演習 振動を感じる</p> <p>演習 何でも楽器 グラス、クッキングペーパー、プラスチックカップ</p> <p>課題 <u>病院の音環境について レポートとフィードバック</u></p>   |

## 2 研究期間

平成27年8月～10月

## 3 授業紹介

A 看護短期大学における平成27年度「芸術・音楽」

の授業は表1の内容である。

それぞれの単元はテーマごとに完結しているが、各テーマには関連性を持たせており、学びの蓄積を目指している。(表1 授業の関連欄参照)「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連

付けて鑑賞する」ということは文部科学省の指導要領の音楽科目の目標の項にも「音楽文化についての理解を深め」と挙げられているが、この授業では、より身近な問題として「人との関わり、人間を知る」ことに重点を置いている。感じ方や価値観の個別性

を知ることは看護師としてのケアにもつながり、また相手の反応に寄り添いながら行っていく音楽療法の基礎をなすものである。授業の初期段階で「芸術・音楽」の学びの位置づけを図1のように示した。

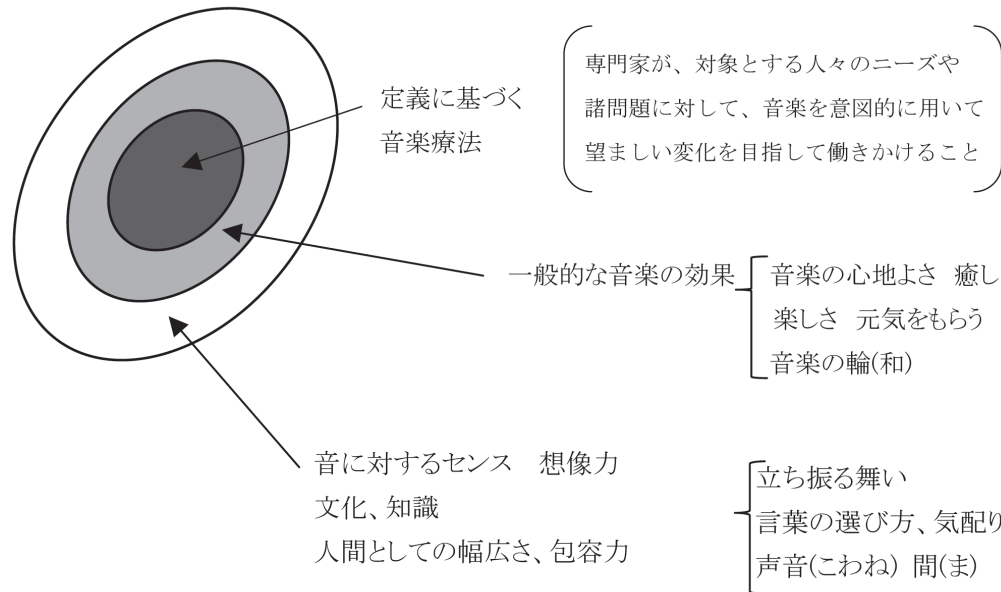


図1 A 看護短期大学の「芸術・音楽」の学びの位置づけ

全ての単元が関連し合うように組み立てているが、本稿では「聴くこと」「見つけること」「感じ取ること」に重点を置いた授業の例として「音環境」の項に焦点を当てて、授業内の演習、初実習である病院見学時の課題とともに紹介する。音環境の授業は表2のように2回4時間からなる。研究対象に挙げたレポートは、表2の中では下線太字で示した部分にあたる。先に述べたように前の授業で学んだことが下地になったり、後の授業で広げたりしているので、関連項目は「前段階の授業」「応用段階およびまとめの授業」として記載した。

次に、サウンドスケープと「音聴き課題」について述べる。

「サウンドスケープ [soundscape]」とは、「サウンド」と「～の眺め/景」を意味する接尾語「スケープ [-scape]」との複合語、すなわち「音の風景」を意味する。この言葉を、単なる造語としてではなく、現代社会における新たなコンセプトとして初めて提唱したのは、カナダの作曲家マリー・シェーファー (R.Murray Schafer/1933～) だった。鳥越<sup>4)</sup>は著書『サウンドスケープ その思想と実践』の中で次のように説明している。音を聴くという行為は、人間

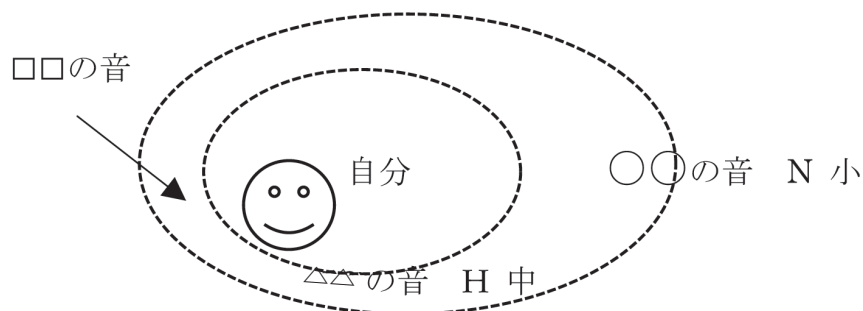
にとって最も基本的な営みのひとつであり、音の世界は私たちの「生」を支えるひとつの重要な次元である。シェーファーは音環境全体を「美的聴取の対象」と考え、人々が従来の「音楽」概念ではすくい上げられなかった魅力的な様々な音を発見することを期待した。

「音聴き課題」とは身をもって音を聴くための課題である。シェーファーがワークショップでの実践のためにまとめた身の回りの音に関する課題『サウンドエデュケーション』<sup>5)</sup>の一部を鳥越が著書で紹介しているが、看護短大の授業に取り入れるにあたってさらに単純化し、学生の演習として扱ったものが以下である。(図2)

- 1) 聞こえた音をすべて書き出す。2、3分でよい。2回、場所または時間を変えて行う。
- 2) 自然の出す音N(Nature)、人間の出す音H(Human)、機械の音T(Technology)に分類する。
- 3) 聞こえた音量を記す(大中小、または数字で)
- 4) 自分を中心に聞こえて来た方向や距離によって配置する。

音環境の単元に入る前に、課題として1)を出し、音環境の授業で身の回りの音やサウンドスケープの

- ① カテゴリー N(Nature) 自然の作り出す音  
 H(Human) 人間の出す音  
 T(Technology) 機械の音
- ② ボリューム 大 中 小 レベル1～5 音量を示すマークなど
- ③ 位置(遠近)と方向



M. シェーファー著「サウンドエデュケーション」を参考に  
 著者作成

図2 課題2の分析

説明後2) 3) 4)の分析に取り組んだ。演習の感想は後の授業でフィードバックした。

#### 4 レポート内容の分析

対象としたレポートのうち「全ての講義を通しての最終レポート」からは音環境に関連した記述を取り上げ、音環境の授業に含まれる「音聴き課題」と「病院見学のレポート」からは様々な学びを幅広く取り上げた。学生が音楽を通じて人間への理解を深め、看護へのつながりを学んだことを抜粋してまとめた。

#### 5 倫理的配慮

「芸術・音楽」の科目全体の成績評価が終了後、対象学生に授業研究の趣旨を説明し、研究に同意しなかった場合それによる成績評価への影響など不利益を被らないこと、研究の途中でも協力を辞退できること、データは個人が特定できないように配慮すること、得られたデータは、教育・研究目的以外には使用しないことを説明した。同意を得られた学生のレポートを研究対象とした。なお、本授業研究は川崎市立看護短期大学研究倫理委員会の承認を得ている。(承認番号 R58)

#### IV 結果 (学生の学び)

学生の学びを表3、表4に示した。表3では「音への気づき」としてまわりの音への気づき、音と心のつながり、音楽の心身への影響などについての学びの記述を挙げ、表4では「看護へのつながり」として、音楽の有用性を看護へ生かすこと、病院見学での経験から音環境や看護師の声音について考えたことなどの記述をまとめた。

##### 1 音への気づき —音楽と心・人間—

学生は身の回りの音に気づき、その音による心身への影響の大きさについて挙げていた。(表3)

##### 2 看護へのつながり

「看護へのつながり」の項では、「音楽の有用性」、「病院見学での経験を通して」の2点にまとめた。(表4)

「音楽の有用性」では音楽の影響力や有用性を看護に生かしていきたいという意見が多かった。また、自らの感受性を豊かにすることに触れ、看護への取り組みに生かしたいという様々な意見がみられた。

「病院見学での経験を通して」は、課題の内容から病院の音環境に関するものが多かった。また、想いと表現について、病院見学における経験からも感

表3 学生の学び1 音への気付き—音楽と心・人間—

| 学生の学び              | 具体的な記述内容  |
|--------------------|---|
| 身の回りの音への気づき        | 今まで意識しなかった様々な音に気づいた。<br>自然の音や生活する中で聞こえる音も“おんがく”であり、音楽の世界はより大きいことに気付かされた。  |
| 音と心の繋がり・心身への影響の大きさ | 音への感じ方はそれぞれで、心理状態によって感じ方が変わる。それは音と心の繋がりがあるからである。<br>自分の身体で音楽を感じる、このことがどれほど身体的、精神的に大きな影響を与えているか、分かったような気がした。<br>音楽と心は密接につながっていて、音楽一つで懐かしく思ったり、楽しくなったり、また感動したりなど様々な感情が生まれる。心への影響力の大きさを改めて実感した。<br>音楽の感じ方はみな違い、気持ちと関係がとても深いことを学んだ。音楽は大きく人の心を動かす。 |
| 音楽と人間              | 世界には様々な音楽があふれている。(中略) これら全ての音楽を大切にしていけることで、その音楽の背景にある文化や歴史を守り、そして未来につなげていくことができる。また、言葉が通じなくても、どんな人とでも、一緒に音楽を楽しむことができる。音楽は世界を変えることのできる一つのツールなのかもしれない。  |

受性に対する意見が述べられていた。病院見学時の感想には看護師の声に関する記述が目立ったのでその部分をまとめて取り上げた。

## V 考察

音楽をはじめとする芸術は、本来個人が好みに合わせ自由に関わるものである。音楽を教育に取り入れる場合は、中学、高校までは感性教育と音楽の基本的な知識・能力を伸ばすことが目標になっており、それ以降は音楽学校や教育分野などそれぞれの専門性に沿った音楽教育となっていく。看護教育の分野で求められるのは、幅広く文化や芸術に触れることで豊かな人間性を育むことである。A看護短期大学において、授業紹介に示したような内容の「芸術・音楽」の授業を通して得た学生の様々な感想を、「深く聴く」ということに焦点を当てて次の3点から考察する。

### 1 人間性を育む

学生たちは授業を通して、「好みの楽曲を気分よく聴くこと」から一歩踏み込み、背景にある人間の想いをより豊かに感じるようになったことがレポートから窺えた。「音と心の繋がりがある」、「音楽は大きく人の心を動かす」、そして更に「その人の人間性が音楽に大変よく反映されていることを学び、

その人の感情を知りたい時、音楽から知ることを学んだ」、「言葉や表情といった『表現』に込められた相手の『想い』の幅広さを知ること、相手の『想い』をすくい上げる方法、自分の『想い』を『表現』にして形に残す技術、自分が経験したことのない『想い』をどれだけ汲み取り、どのような『表現』で応えるか(中略)音楽はひとつの手がかりになると考えている」など、音楽を通して人間を理解し、豊かな感性や人間性を育むという教育目標につながる学びが得られていたと考える。

### 2 「深く聴くこと」から看護へのつながり

学生の感想に「講義を通して学んだことは『耳をすます』『聞く』ことの重要性である。(中略)傾聴はもちろん、声にならないようなため息や咳の音など患者さんのサインを見逃さないことこそが、質の高い看護につながると思う」とあるように、学生たちは「聴くこと」から看護へのつながりを学び取ったと考えられる。音楽を通しての「深く聴く」経験は、看護における傾聴する力やコミュニケーション力などの学びに結びついたと考える。

「聴くこと」に関連して音環境の授業の後半では、「静けさとは何か」「騒音とは何か」について考える時間を取っている。山岸が『音の風景とは何か』サ

表4 学生の学び2 看護へのつながり

| 学生の学び       | 具体的な記述内容  |
|-------------|---|
| 音楽の力を看護に生かす | <p>看護と音楽のつながりを考えてケアにも活用していければと思っています。</p> <p>医療行為としてではなく、音楽によって、患者の不安な気持ちや苦しい病を緩和する力があることを知った。</p> <p>音楽や音の感じ方は1人1人違い、個々の好みがあるが、しっかりとそれを理解していれば患者の精神的援助に役立たせることができると考えた。</p> <p>音楽の影響力を有効に活用し、患者に心地よい音を提供できる看護師になりたいと感じました。</p>   |
|             | <p>自らの感受性を豊かにし、看護への取り組みに生かしたいという様々な意見</p> <p>講義を通して学んだことは『耳をすます』『聞く』ことの重要性である。(中略)傾聴はもちろん、声にならないようなため息や咳の音など患者さんのサインを見逃さないことこそが、質の高い看護につながると思う。</p> <p>看護師として患者さんと接していく時も、私から出る音、言葉、患者から出る音、言葉、周りの環境から出る音、言葉を大切に、音楽を通してだからこそ出来るコミュニケーション方法を探してみたいと思った。</p> <p>その人の人間性が音楽に大変よく反映されていることを学び、その人の感情を知りたい時、音楽から知ること学んだ。しかし、なにも音楽に限った話ではなく、ただ発する声からでもその人の気持ちがわかるだろう。将来看護師として働いた時、聞き漏らしがないように、しっかりと耳で聞いて感情を読み取り行動に起こしたい。</p> <p>たくさんの音楽に触れて感受性を高めていきたい。素晴らしい音楽を聴いたときのように、患者の言葉や想いがすうっと耳や目の中に入り、心でしっかり受け止められる、そんな看護師になれるように。</p> <p>患者さんが出すさりげないサインは音のサインもあると思うので、そういったサインを見逃さない人になっていきたい。そのためには、機械の音の中に埋もれつつある自然の音にも耳を傾け大事にしていきたいと強く思った。</p> <p>患者一人一人感性があり、体調もそれぞれ違い、そして日々変化するので(中略)、その表情、手足の動き、呼吸などをよく見て常に気にかけることの大切さを音楽の授業を通して学んだ。</p> <p>音楽ではいろんなことを学んだが、全てを通していえることは“正解はない”ということだ。好き嫌いは人それぞれで、精神状態によってもとらえ方が変わる。これは看護に通ずるところがあり、個人または変化に柔軟に対応する必要がある。このことを音楽の授業を通し、違う側面から学ぶことができた。</p> |
| 音楽の有用性      | <p>病院の音環境に関するもの</p> <p>病院の非日常性、生活音の少なさを感じた。</p> <p>看護師は患者の音環境に配慮し、不必要な音は排除しなければならない。</p> <p>病院見学の際、病棟(小児)に不必要な音はなく、そのおかげで様態の変化にいち早く気づいたり、要望を聴きとったりできていた。</p> <p>ガラガラしたワゴンの音や看護師の足音は耳障りな反面、人によっては「看護師さんが来てくれた」との安心感をもたらすのではないかと。</p> <p>無意識のうちに自分に必要な音を選んで聴いているので、看護師にはこう聞こえても、患者さんには違うように聞こえると思われ、立場によって聞こえ方感じが違うので一概に言えない。</p> <p>すべての患者さんが安心して治療に専念できる環境を整えるには、音の関わり方についても意識しなければならない。</p> <p>看護師になったら、身体面、精神面はもちろんだが、環境面からも支えたいと考えることができた。</p>   |
|             | <p>想いと表現</p> <p>音楽の講義を通して、音楽に込められた様々な「想い」と「表現」の形に触れることができた。病院見学では看護師が患者さんの感情を察知する感覚の鋭さを目の当たりにした。言葉や表情といった「表現」に込められた相手の「想い」の幅広さを知ること、相手の「想い」をすくい上げる方法、自分の「想い」を「表現」にして形に残す技術、自分が経験したことのない「想い」をどれだけ汲み取り、どのような「表現」で伝えるか(中略)音楽はひとつの手がかりになると考えている。</p>  |
|             | <p>看護師の声に関する記述</p> <p>看護師は病室の雰囲気に合わせて声かけや声の高さを変えてケアを行っていた。心地よい空間を作り出すために、音のトーンや全ての行動から出る音のリズムが患者さんに大きな影響を及ぼすことを課題を通じて学んだ。</p> <p>看護師は学生に話かけるときは小さな声で、患者さんに話かける時は声の大きさを変えていて、どのような場所でどのような音が適切かを考え実践するのも看護の要素なのだと実感した。</p> <p>ひそひそした人の話し声というのは落ち着かないが、看護師の声はしっかり声通っていて安心する。</p> <p>患者さんにやさしく話かける看護師のあたたかい声を聞いて自分の気持ちもあたたかくなった。</p>   |

サウンドスケープの社会誌<sup>6)</sup>の中で「私にとって静けさとは」という文を学生（1995.2 慶應義塾大学の学生 32 名を対象とした調査）に綴らせた時の回答例を載せているが、静けさは音が無い状態ではなく、人によって様々なとらえ方があり、落ち着きや安らぎであるとともに恐怖、孤独、緊張というとらえ方も出来ることがあげられている。また、山岸は「シェーファアのサウンドスケープ論を参照することにより、日常的体験の文脈において、多様な音の世界の広がりから生起してくる(中略)「音楽」「騒音」「ことば」「声」「沈黙」、さまざまな音を出来事として理解し、それらの相互の関係に注目する時、私たちは音世界を広く深く展望することができるのである。」と述べている。

今回、看護学生たちが病院見学実習で病院内のまわりの音を聞き取り感じて考察したレポートからは、結果 2 「病院見学での経験を通して」で述べたように深い音の理解が感じられた。(表 4 参照) 病院内の音から「非日常性、生活音の少なさ」を感じ、「ワゴンの音や看護師の足音は耳障りな反面、人によっては『看護師さんが来てくれた』との安心感をもたらすのではないか」、「立場によって聞こえ方感じ方が違う」などを聴き取ったことは、山岸のいう「音世界を広く深く展望すること」につながり、「音聞き課題」に加えて様々な学びを関連づけたことで、教育効果を高められたと考えられる。

広井は『ケア学 越境するケアへ<sup>7)</sup>』の中で「ケアという行為は相手の話に耳をすますことで、二人はより深い何かにふれ、それを共有する、といったことがあるのではないだろうか」と述べている。学生の記述の「言葉や表情といった『表現』に込められた相手の『想い』の幅広さを知ること」、「素晴らしい音楽を聴いたときのように、患者の言葉や想いがすうっと耳や目の中に入り、心でしっかり受け止められる」などは、広井の述べた「深い何かにふれ、共有する」という感覚に通じるものと考えられる。これらのことは、言語的コミュニケーションのみならず非言語的コミュニケーションという学びにも結びついたと言えるのではないだろうか。

### 3 芸術の深さ

音楽の専門書の中でも当然ながら聴くことの重要性は述べられているが、それは単純に音を聞くことではない。ヴァイオリニストで教育者であるドミニ

ク・オプノは著書『内なるヴァイオリン 演奏についての考察<sup>8)</sup>』の中で「聴くことこそ、音楽家が真剣に取り組める最も建設的な活動である。(中略)

ほんとうに聴くためにはまず、沈黙を聴くことができるようにすることだ。沈黙の中でこそ、内面に耳を澄ますことができるのだ。」ここに述べられている「沈黙の中で聴く内面」とは先に述べた「深い何か」と共通するものであろう。

今回の看護学生の感想においても、「自然の音や生活する中で聞こえる音も“おんがく”であり、音楽の世界はより大きいことに気付かされた」、「世界には様々な音楽があふれている。(中略)これら全ての音楽を大切にしていけることで、その音楽の背景にある文化や歴史を守り、そして未来につなげていくことができる。また、言葉が通じなくても、どんな人とも、一緒に音楽を楽しむことができる。音楽は世界を変えることのできる一つのツールなのかもしれない」などのように、幅広く文化や芸術に触れることによって、芸術そのものの素晴らしさについて触れたという意見が記述されていた。

以上 3 点について、考察してきたが、川島<sup>9)</sup>は「質の高い看護を提供するためには「深い洞察力や想像力が求められる」と述べ、「何よりもその入り口の感性を鍛えることが大切」であり「看護の世界では『気づき』という言葉で呼ばれている。よりよい看護実践も看護研究もこの感性が基礎になると言ってもよい」と述べている。「芸術・音楽」の授業は芸術の深さ、音楽の楽しさという側面を失うことなく、むしろその力によって学生の「深く聴く力」という感性を育て、学生自らが学びを看護に生かす可能性を探り見出ししており、対象学生全員のレポートから何らかの「気づき」を経験していることが読み取れた。音楽の受け取り方が人それぞれであるように、課題や演習を通して感じたこと考えたことも学生によって様々である。自由な発想を引き出し、それらを受け止めた上でフィードバックなどにより共有し、更に考察するという授業の展開は、芸術科目の特性を生かした A 看護短期大学独自の授業としての役割を果たしていると考えられる。

## VI 結論

本学 1 年次選択科目「芸術・音楽」の授業内容を紹介し、学生のレポート及び感想をもとに考察した結果、次のような結論が得られた。



- 1 授業を通して音楽が人の心と深く結びついていることを再認識することによって、人間の想いをより理解し、「人間」とその営みについて深く考え、豊かな感性や人間性を育むという教育目標につながる学びが得られていた。
- 2 「深く聴くこと」に重点をおいた様々な授業内容や演習を通じて、音や音楽を深く理解するだけでなく、傾聴することやコミュニケーションなど看護にとっても重要な部分に結びつく学びが得られていた。
- 3 学生たちは音楽の広い世界に触れて、喜びや感動を経験し、芸術の深さや素晴らしさとともに、より自由な発想を持つなど、芸術科目ならではの学びが得られた。

## Ⅶ おわりに

本稿をまとめるにあたり学生のレポートや感想を紐解いていくと、全て音楽・音の世界への深い愛情を感じる。このことは、私が音楽の専門家として向き合い、求め続けていることを学生と共有しようとした結果、学生は自分たちが専門家を目指している看護やケアにおける奥深い共通点を見出したと言えるのではないだろうか。芸術と看護教育それぞれの本質の接点として「深く聴くこと」を中心に本稿を記したが、他にも多くのテーマを取り上げているので、今後も模索を続けていきたい。学生の内なる感覚に働きかけ、何かをつかむきっかけとなるよう、これからも新鮮で柔軟な取り組みを重ねていきたいと考えている。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝致します。

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省 学習指導要領. 平成 20 年告示 27 年一部改正. 各教科(高校では各科目)目標 [www.mext.go.jp](http://www.mext.go.jp)
- 2) 川崎市立看護短期大学. HANDBOOK OF COLLEGE LIFE 2015. 各学年の到達目標 p.2-3
- 3) 梶ひとみ他. 日本伝統音楽の生演奏鑑賞による看護学生への感性教育の効果. 川崎市立看護短期大学紀要. 19 巻1 号, 2014, p.69-75.
- 4) 鳥越けい子. サウンドスケープ その思想と実践. 鹿島出版会, 2004, p.8, p.45-46, p.96-100.
- 5) マリー・シェーファー. 鳥越けい子他訳. サウンド・エデュケーション. 春秋社, 1992, p.11-13.
- 6) 山岸美穂・山岸健. 音の風景とは何か サウンドスケープの社会誌. NHK ブックス, 2005, p.89-92.
- 7) 広井良典. ケア学 越境するケアへ. 医学書院, 2003, p.3-5.
- 8) ドミニク・オプノ. 中島弘二訳. 内なるヴァイオリン 演奏についての考察. 音楽の友社, 1990, p.102.
- 9) 三上満, 川島みどり他. 看護大好き、人間大好き. かもがわ出版, 2003, p.93-98.